

(3) 全体のまとめ

文章の構造モデルという点では、本研究ではそれほど大きな進展は得られなかった。文章の構造は、対象とする文章の種別に大きく依存する。そのため、汎用モデルは、たとえば、起承転結のように非常に抽象的なレベルの記述となり、実際の文章生成・解析処理にはほとんど役に立たない。つまり、文章生成・解析のために、それぞれの種別に対して構造モデルを設定することが必要となる。

文章生成技術については、文合成ツール、文型集ツール、文章生成ツールの3つルールで、文章生成システムを構築することができることが明らかになった。文章生成ツールでは、文を部品として、文章を組み立てる方法を記述する。部品となる文は、文型集より提供される。それぞれの文型は文合成ツールによって記述され、1つの文型で多様なバリエーションを生成できる。これら3つのツールが担当すべき範囲がはっきりしているため、以前に比べて、必要な作業が明確となり、文章生成システムの実現が容易となった。

文章解析技術は、汎用的なツール化が難しい。Panzer は、文章の構造把握に必要な足掛かりを提供するが、文章ではなく文の解析ツールである。文章解析の最大の障害は、その最終ゴールをどこに設定するかが明確ではないという点にある。そのため、研究の後半では、問題を解くという明確なゴールを設定して、問題文(文章)の解析に取り組んだ。そこでは、領域知識をうまく使うことが重要であり、文章の理解とは、文章から引き出した情報と読み手が持つ知識とのインタラクションにあるという考えに至ることになった。

以上をまとめると、本研究の最大の成果は、文章生成のための3つのツールの実現による広告シナリオの生成支援システムの実現である。

1. 発表者名 佐野正裕, 佐藤理史, 宮田玲
2. 発表標題 文末述語における機能表現検出と文間接続関係推定への応用
3. 学会等名 言語処理学会第26回年次大会, B6-3
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤理史
2. 発表標題 文章生成研究は楽しい
3. 学会等名 情報処理学会第239回自然言語処理研究会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤理史
2. 発表標題 コンピュータが小説を書く日
3. 学会等名 AIと日本語教育 国際学術研究会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐野 正裕, 佐藤 理史, 松崎 拓也
2. 発表標題 評論文における対比構造とその自動検出
3. 学会等名 言語処理学会 第25回年次大会
4. 発表年 2019年

